

法然における善人往生と惡人往生について（龜 山）

法然における善人往生と

惡人往生について

龜 山 正 廣

今日、法然における善人・惡人往生の問題が種々に論議されている。その代表的な一説は家永三郎氏の法然是善人を正機とし惡人を傍機にしていたという、いわゆる善正惡傍の往生である。が、この説に対して梶村昇氏は反論を出され、既に法然には人間の本質を惡とみなす惡人正機の考えがあつたと力説されている。こうした兩氏の主張は法然遺文資料中にそうした思考内容が見出されるからであつて、いずれか片方の説のみを認めるといったわけにはゆかない。

そこで、法然思想の今日的研究方法としては、石井教導氏が『昭和法然上人全集』序にて指摘されている如く、法然思想をたゞ単にある時期をもつて形成されたとみるのではなく、漸次に形成されたと思想史的に把えてみる必要があるのではないかと考える。小論ではかかる観点に立ちこの善人・惡人往生の問題について、法然の根本主張である専修念仏一行の形成過程をたどるなかで論及してみたい。

法然が専修念仏に帰入（四十三歳）して以後、彼の念仏形成を思想的に石井・大橋俊雄兩氏の説に基づき区分すると、初期―『三部經大意』（四十三歳）頃の思想を中心に、念仏の易の義に力点を置く時期、中期―『三部經釈』（五十八歳）『逆修說法』（六十二歳）の思想を中心に、選択思想に基づき念仏の勝易の二義を明確化する

時期、後期―『選択集』（六十六歳）の思想を中心に、念仏の勝の義をより一層に具現化する時期、という具合になる。（『往生要集釈』は成立時期について問題があるので、ここでは取り上げない。）

まず、初期の『三部經大意』の思想では、第十八念仏往生の願を「殊勝の願」「超世の願」として重視する。が、この時期ではまだ念仏を他の行法に比べて勝であるとは明示していない。各行法は「勝劣ある」ことなく、「機縁純熟」すればそれぞれに利益があると説く。但し、現今の末法劣機には諸行を修することが困難であるから、易行易修の念仏が時機相応の行法として勧進される。すなわち、仏教の歴史観により、正法・像法・末法と時代下降にともなう機根の劣等悪化が顧みられ念仏行が強調される。そこで法然はまた、現今の末法時のものを法滅時のものと比べた時には、「我等惡業ふかしと云へとも未造五逆」といい、思想史的に『三部經大意』の次の成立時期と考えられる『往生大要鈔』においても、「五逆の罪人をあげてなを往生の機におさむ、いかにいはんや善人をや」という如く、自分達を未造五逆の善人としてみなす。しかして、初期思想では現今末法の機類を法滅時のもの（五逆者）に比べて善人というのであり、いわゆる善正惡傍の念仏往生ということになる。

次に、中期の『三部經釈』『逆修說法』の思想では、「選択」という言葉がみえはじめ、念仏に勝易の二義があると示す。勝とは、弥陀仏の名号には万徳を具するから各々の一隅を守る諸行よりも勝れているとする。易とは、布施・起塔・稽古讃仰……等をもつて別願とすれば一切貧窮の人・一切困乏の倫……等の人達には不可能であるから、一切衆生に可能な念仏行が選ばれたとする。易の義は実践的な立場（時代・機根等が問題）より行法を把えるもので、突きつ

めていえば初期思想と同様に善正惡傍の往生とならう。他方、勝の義は易の義とは立場を異にする。なぜならば、この義は第十八願選択思想（善妙なる念仏は選択、龜惡なる諸行は選擇）とあいまつて、仏（法）の立場より語るもので、時代・機根等の問題は越えているからである。かかる観点に立つ時、念仏は衆生にとり淨土往生するための唯一の行法にならう。換言すれば、衆生が善妙なる仏土（淨土）に往生し善妙なる身になれるのは、弥陀仏が本願行として誓う善妙にして万徳を具する念仏によつてのみといわねばならない。が、逆にこの念仏を修さないと、もしくは非本願行として選擇の龜惡なる諸行を修するとすれば、衆生は到底善妙なる身にはなれない龜惡なる存在のままということにならう。すなわち、ここでは念仏（仏）の善に対する衆生の惡という關係が成立しているわけである。しかして、中期の思想では易の義を通してみる時代・機根觀よりの相対的善惡關係と、勝の義（選択思想を含む）を通してみる仏と衆生における絶對的善惡關係が併存するということになる。

最後に、後期の『選択集』の思想であるが、この書は主著といわれる如く法然遺文資料中では論旨が最も組織的に整理されていて、各十六章は専修念仏一行の主張で一貫している。そのなか、中心的意義を有するのは中期思想で明かした選択に基づく勝易の二義を示す第三「本願章」であると考ええる。が、ここで思うに、本来的に念仏が他のいかなる行法よりも勝としての究竟法であるならば、当然そこに易の義は内在すべきものとして語るべきではなからうか。というのは、行法は衆生に実践可能であつてこそ真に行法としての意味をもち得るのであり、不可能であればたとえ行法がいかにほどに高遠な哲理を有するものであつても有名無実化して、決して究竟法と

法然における善人往生と惡人往生について（龜山）

されるべきではないからである。それ故にか、『選択集』では第三章以下で念仏を明かす場合、その説明は易の義ではなく専ら勝の義をもつてなしている（第五章、第六章、第七章、第十一章、第十二章、第十三章等）。とりわけ、第十二「念仏付属章」では念仏が諸行に超勝するという立場に立つて廢立を下し、その後、両者の具体的な關係を展開させて、諸行は弥陀・釈尊の方便隨他意の法門であるが、念仏は弥陀・釈尊の眞実隨自意の法門であるという。ここにて、先述の選択思想・勝の義と眞実隨自意の三つは一連に結びつく思想となるが、すなわち、念仏は超歴史性をもつ行法として、正法・像法・末法・法滅の時代や、有智無智・善人惡人・持戒破戒……等の機根といつた相対的な差別を越えて修すべき行法になる（『鎌倉二尼の禪尼へ進ずる御返事』六十八歳、『正如房へ進ずる御返事』七十三歳以降等参照）。しかして、かかる念仏を信じ修するものとするでないものの境界については、第八「三心章」にて「生死の家には疑を以つて所止と爲し、涅槃の城には信を以つて能入と爲す」という如く、生死（龜惡な世界）に留まるか涅槃（善妙な世界）に至るかに示す。すなわち、弥陀仏の前における衆生はみな惡なる存在であるが故に、また弥陀仏に対する衆生の信不信が同時に善惡の問題にかかりあうのである。こうした意味において、後期思想では衆生を仏に對峙して平等に救済されるべき惡なる存在と規定する方向が強い。（『一枚起請文』八十歳等参照）

以上、法然の善人・惡人往生の問題は彼の念仏思想形成の面よりみると、単に相対的な時代・機根觀よりの善正惡傍の往生を説いたとのみいふべきではなく、漸次衆生を絶對惡とする往生の方向に深まつているといえる。（『真宗学』第五十四号収録の拙稿論文参照）